

2004年12月27日

人間科学研究科長 殿

井澤 修平 氏 博士学位申請論文審査報告書

井澤 修平氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受け審査を行ってきましたが、2004年12月18日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

記

1. 申請者氏名：井 澤 修 平

2. 論文題名：日本人における敵意性と冠動脈疾患の関連性

3. 本論文の構成と内容

本研究は、日本人における敵意性と冠動脈疾患 (Coronary Heart Disease: CHD) との関連性について検討を行ったものである。第1章では、これまでの心理社会的要因 (特にタイプA行動パターン、怒り、敵意性など) とCHDとの関連性についての先行研究を概観し、日本人に特徴的な心理社会的要因についての研究の必要性を論じている。

第2章では、敵意性の概念についての欧米と日本との異同を論じ、敵意の表出されにくい日本文化の影響を考慮して敵意性の認知的な要素としてのシニシズムを測定する尺度 (Cynicism Questionnaire: CQ) を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。その結果、因子的妥当性、Buss-Perry 攻撃性質問紙および Anger Expression Inventory との併存的妥当性、そして Cronbach の 係数による内的整合性が確認された。

第3章では、敵意性とCHDを結びつけるメカニズムについての Smith (1992) の3モデル (精神生理的反応モデル、心理社会的脆弱モデル、健康行動モデル) に沿って、生理的反応性、対人環境、健康行動の3要因とCQ尺度で測定された敵意性との関連性の検討を行った。その結果、敵意性の高い者は、怒りが喚起される状況や他者から評価を受けるような場面において、拡張期血圧の上昇および抹消血管抵抗の増大などの心臓血管反応性が高いことが示された。また、敵意性が高い者は、日常生活場面で対人的なストレスの多いこと、ソーシャル・サポートの少ないこと、回避的なコーピングが多いことが示された。そして、生活習慣に関しては、敵意性と飲酒量、喫煙習慣、短い睡眠時間、不規則な食習慣との関連性が示された。これらの結果から、敵意性高者の対人場面における脆弱性は、社会的・生理的・行動的な側面において悪影響を与え、CHD発症に関与している可能性が示唆

された。

第4章では、循環器専門病院に入院中あるいはリハビリ中の急性心筋梗塞患者40名(すべて男性、平均年齢 $54.3 \pm 9.9$ 歳)を対象に半構造化面接および質問紙による調査を行い、敵意性とCHDとの関連性を検討した。その結果、急性心筋梗塞患者では、健常群と比較してCQ尺度得点の高い傾向が認められ、CQ得点の高いことが心筋梗塞発症リスクとしてオッズ比で3.27~3.83であることが示された。また、急性心筋梗塞発症前1年間のライフイベントについても調査を行い、配偶者との別居や失業などのライフイベントが健常者よりも多く、CHD発症の引き金となっている可能性も示された。

本研究の結果は大部分において欧米の研究報告を支持するものであった。完全なケースコントロール研究ではないが、敵意性とCHDの関連性は認められ、敵意性とCHDを結ぶメカニズムについても比較的類似した傾向が得られた。一方で、日本と欧米では異なる点もみられた。例えば、欧米の敵意性高者の特徴とは違い、日本の敵意性の高い男性では対人的な葛藤の認知や存在を回避する傾向がみられたが、これは対人的な葛藤を好ましくないと考える日本の文化的背景が関与しているのかもしれない。本研究は、日本人における敵意性とCHDの関連、およびそのメカニズムについて一連の形で検証を行ったという点において意義あるものと考えられる。

本研究では敵意性とCHDの関連性について示してきたが、欧米と比較して、日本ではこの分野の研究はまだ初期の段階にあるといえる。今後の課題としては、縦断的調査や精神生理学的メカニズムの検討、および他の心理社会的要因との関連性についても検討する必要がある。また、欧米で行われているようなCHD予防に向けた心理的介入方法についても検討する必要があることを言及している。

#### 4. 本論文の評価

欧米では、1950年代後半からのタイプA行動パターンの研究から始まって、最近では怒り・敵意性とCHDとの関連性についてさかんに研究されている分野ではあるが、日本においては、敵意性とCHDの関連について、本研究のように詳細に検討した例は少ない。日本では敵意性とCHDの関連について検討した研究はいくつかあるものの、その結果は一貫していない。その問題点としては、標準化されていない尺度を使っていること、患者の行動パターンのみを扱っていること、冠状動脈造影で狭窄のある患者を対象としていること、敵意性とCHDの関連のみを検討していることなどがあり、敵意性とCHDの関連性を示すエビデンスとしては不十分である。本研究では、標準的なCQ尺度を用い敵意性とCHDの関連性を示したのみならず、そのメカニズムについても詳細な検討を行っており、また急性心筋梗塞患者を対象とした臨床研究を行っており、本研究で示された敵意性とCHDの関連性はより説得力のあるものといえる。これらの研究は関連の学会でも高い評価を得ており、日本行動医学会では学会賞を受賞している。今後の研究課題は残されているものの、日本の敵意性とCHDとの関連についての研究では嚆矢となる内容である。

上記のような評価により，本審査委員会は，井澤修平氏の学位申請論文「日本人における敵意性と冠動脈疾患の関連性」が博士（人間科学）に値する研究であるとの結論に至った．

5．井澤 修平氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学	教授	博士（医学）（東京大学）	野村 忍	印
審査員	早稲田大学	教授	医学博士（東邦大学）	山崎 勝男	印
審査員	早稲田大学	教授	Ed.D.（Boston Univ.）	竹中 晃二	印
審査員	早稲田大学	教授		児玉 昌久	印